



さわやかシックス

宜野湾記念病院 外科
仲地 広美智

本土から見渡せば沖縄本島も離島であり、そのさらに離島の伊良部島、そこが私の故郷である。子供の頃は、道路で遊び、馬に蹴られることはあっても、車に轢かれることはまずなかった。島全体が自然公園のようで、至るところが遊び場であった。自宅から数分歩けば、海水浴ができる佐和田の浜（日本の渚100選に認定されている）があり、車で15分も走れば通り池（ダイビングスポットとして有名です）があり、さらに15分もすれば、裸足で歩いても痛みをか感じる事の無い極め細かな砂浜が広がる渡久地の浜がある。豊かな自然に満ちあふれ、貧しくても島人の顔は常に笑顔に満ちあふれていた。しかし、この伊良部島も段々と過疎化が進み、私が小中学生の頃は1万人位住んでいたが、現在の人口は7,000人位である。当時4つあったクラスもだんだん減少し、現在では学年で1クラスとなってしまった。昔からバレーボールが大変盛んな島で（小生もバレー愛好家の一人で、一応中学から大学までバレーボール一筋でした。「今の私の体型からは想像できない」カミさんと子供二人の談）。前置きはこれくらいにしてそろそろ本題に入るが、この小さな伊良部島にある伊良部高校が、バレーボールの名門であることは沖縄全島では広く知れ渡っている。全県の大会を何度も制覇し全国大会出場を何度も果たしている。さて、第38回バレーボール全国高校選抜優勝大会沖縄地区予選の大会最終日、男子の決勝は平成19年2月12日に那覇市民体育館で行われた。伊良部高校と西原高校が決勝戦で戦い、西原高校が3-0で伊良部を下し2年連続16度目の優勝を果たした。新聞紙上では「西原貫祿」だの「エース故障補う組織

力」だったので、主役は当然西原高校であった。しかし、私の目には、伊良部出身という欲目があったかも知れないが、この試合での本当の主役は伊良部高校の6人の選手であった。たった6人の部員で全試合を戦って来たという事実に、バレーボールファンに限らず、多くの人々が感動し勇気づけられたと思うからである。ご存知のようにバレーボールは6人対6人で戦うスポーツであるが、レギュラー選手として12人を登録することが出来る。当然、調子の悪い選手、レシーブ、サーブ、アタック、ブロック等の各々の技術が高い選手を戦況に応じて使い分けることが可能である。しかし伊良部高校は6人のみの登録選手で本大会の全試合を戦い抜いた。もし1人でも捻挫、打撲あるいは怪我でなくてもインフルエンザなどの病気に罹患すれば、交代要員がいないため戦うことが出来なくなる。実際は、大会期間中に体調不良の選手もいたのではないかと推察している。この試合の解説の特別ゲストとして招待されていた大古誠司氏（1972年ミュンヘン五輪金メダリスト）も、この点で伊良部高校を絶賛していた。バレーボールに限らず団体スポーツの基本はチームワークであることは言うまでもない。6人の選手の中には、本人、家庭の事情で部活を辞めたいと考えたりする者もいたのではないだろうか。あるいは意見、価値観の相異から部員同士で何度も衝突があったのではないだろうか。6人のみということとは、実戦形式の練習（いわゆる紅白戦）が出来ないということになる。様々な苦勞があったと思われるが、最低人数で全試合を戦った選手諸君と、選手の体調管理に万全を尽くした伊良部高校の監督さんには頭が下がる。

さて、高校野球ファンなら誰でも記憶にあると思うが、1974年春の甲子園（第46回大会）に出場した池田高校は、メンバーが11人という何とかゲームが出来る人数であった（ちなみに当時はベンチ入り出来る登録選手は14人であった）。怪我人や病人さえ出せない状況のなかで、チームが一丸となってプレーする姿は、多くの高校野球ファンに感動を与えた。決勝戦で



リレー随筆

は惜しくも地元の報徳学園に1-3で惜敗したが、その試合で池田のプレーに地元の報徳学園よりも大きな拍手があったことを今でも鮮明に覚えている。この11人全員が一丸となってプレーする姿は「さわやかイレブン」と呼ばれ、甲子園に池田旋風を巻き起した。私の記憶の中で、33年の年月を経て、池田高校野球部と伊良部高校バレー部が重なったため、伊良部高校バレー部員6人を「さわやかシックス」と呼ばせて頂くことにした。ともに高校野球、高校バレーの原点となるような活躍ぶりであり、観る人にさわやかな感動をもたらした点で酷似するからである。お金をかけて、中学の一流選手をスカウトしたり、一流高校に入学する選手が後をたたない。それは何故か。その方が、全国制覇に限りなく近道だからである。この2つのチームのように地元だけの選手で頑張っ勝ち上ろうとは思わないだろうか。話は変わるが、小生は研修医時代を山形県で過ごしたが、昭和59年の夏の高校野球大会（第88回全国高等学校野球選手権大会）の山形県代表は日大山形高校であった。しかし登録選手12人の中に地元山形出身が一人もいないという事態が発生し寄付金の集まりが例年に較べて悪かったと聞いたことがある。当時の選手には申し訳ないが、無理もないことだと思う。「当然地元選手が出場を応援する目的で寄付する」という考えを受け入れるのは容易だからだ。地元のチームに入部し、地元の住民に支えられながら、強くなり大舞台に立つ。これがバレーボール、野球に限らずアマチュアスポーツの原点と思う。「さわやかイレブン」を率いた蔦監督の池田高校での甲子園初出場は監督就任20年と遅かった。それでも頑張ったのは「山あいの子らに1度は大海を見せてやりたい」との願いからだだったという。伊良部高校の監督さんも同じ気持ちだったのだろうか。小学校6年生の私の息子が好きな「メジャー」というNHKの人気野球アニメがある。プロ野球選手を父に持ち、ジャイロボール（メジャーリーガー：レッドソックスの松坂投手の投

げる魔球とのことで有名になったが、元々このアニメでジャイロボール人気が高まったらしい)を操る吾郎少年が、次々と弱小チームを超一流にしていく。そして甲子園で常勝の高校に入学するが、そこで甲子園を目指すことなく、野球部の無い高校に移り、野球部を立ち上げ、甲子園を目指し頑張る姿が、とても感動的である。伊良部高校「さわやかシックス」、池田高校「さわやかイレブン」、「アニメメジャーの吾郎少年」に共通するのは、「目的」に向かって「努力」をし「夢」をあきらめないこの三点であろう。現在は、「格差社会」「勝ち組負け組」「虐め」など耳障りな言葉が蔓延り、今の若い人達には厳しい時代と思われるが、彼らを見習い頑張っ欲しいと思う。最後に夢と感動を与えてくれた伊良部高校バレー部「さわやかシックス」に心から有り難う。

★リレー状況

—平成16年以前掲載省略—

42. 宮城茂先生（独立行政法人 国立病院機構
沖繩病院）Vol. 41 No. 2
43. 祝嶺千明先生（しゅくみね内科）Vol. 41 No. 3
44. 宮城裕二先生（みさと耳鼻科）Vol. 41 No. 4
45. 親川富憲先生（おやかわクリニック）
Vol. 41 No. 6
46. 折田均先生（ハートライフ病院）Vol. 41 No. 7
47. 湧田森明先生（わくさん内科）Vol. 41 No.9
48. 宮良球一郎先生（宮良クリニック）Vol. 41 No.10
49. 蔵下要先生（浦添総合病院）Vol. 41 No.12
50. 樋口大介先生（独立行政法人 国立病院機構
沖繩病院）Vol. 42 No.3
51. 古謝淳先生（南山病院）Vol. 42 No.5
52. 城間清剛先生（城間クリニック）Vol. 42 No.7
53. 野原正史先生（のはら元氣クリニック）
Vol. 42 No.10
54. 久貝忠男先生（沖繩県立南部医療センター・
こども医療センター）Vol. 42 No.12
55. 米田恵寿先生（沖繩県立宮古病院）
Vol. 43 No.3